

公開講演会発表要旨

特別公開講演会

中国社会科学院考古研究所長 王仲殊先生

呉の「鏡師陳世」製作の神獸鏡を考へる・京都府福知山市広峰15号墳出土の盤竜鏡について

陳一族は、鮑・唐一族とともに元来、呉の版図である呉郡、山陰の鏡師であったことが鏡の銘文からわかる。陳一族の陳世作の神獸鏡は、中国南方で5枚発見されており、銘文から呉の隆盛期（228年、229年）に武昌で製作されたものであるといえる。この陳世と同族である陳是は、「本是京師、絶地亡出」などの銘文から、呉滅亡によって日本へ亡命したと考えられ、日本で三角縁神獸鏡を製作した。陳是は広峰15号墳などの「景初四年鏡」も製作した。中国に存在しない景初四年の年号の存在は、陳是が魏明帝の景初三年死去の情報を知り得ない遠い日本にいた傍証となる。その後、陳是は洛陽から帰国した使者から正始元年の改元を知り、「正始元年鏡」を製作する。これらの鏡上の笠松文も日本特有であり、製作地が日本であったことをさらに裏付ける。

（佐川正敏抄訳）

古代における墨書人面土器祭祀 墨書人面土器は奈良時代中頃から平安時代前期かけて祭祀に使用された遺物であり、時代とともにその祭祀内容も変質する。奈良時代には甕形土器に人面を描くのが原則であり、都城及びその周辺では人面を描くために特別に作られた甕形土器が使われている。奈良時代の墨書人面土器祭祀は疫病が遠国あるいは疫病発生地から都城への侵入を防ぐ目的で行われた国家祭祀であり、太宰府周辺・山陽・北陸・常盤・多賀城周辺及び畿内諸国・都城周辺に分布をみる。その分布国は文献から知りえる疫病発生国、疫神祭をとり行う国々とはほぼ一致し、疫神の侵入を防ぐために拠点的かつ重層的に行われている。奈良時代末以降、おそらく新しい宗教（密教）の登場とともに墨書人面土器祭祀は次第にすたれ、それとともに個人的祭祀・民間祭祀へと変質していく。その変質は人面を描く対象の変化（甕→杯・皿）、祭祀場所の多様化現象等に見ることができる。

（巽 淳一郎）

古代都城条坊制度の再検討 平城京条坊の地割の基準尺度が、かつて明らかにしたように、大宝令大尺であったことは、ここ数年さらに蓄積された発掘調査のデータで補強される。その中で新たに判明した興味深い事実の一つは、大路と大路の中間に通じる“坊間路”および“条間路”の道路規模が、大路級となる特殊例を除くと、ほとんどが側溝心間距離で約9m・25大尺となることである。このことは、藤原京の条坊道路のうち、奇数条大路が偶数条大路よりも一ランク小規模につくられ、それが平城京の坊・条間路と全く同規模であることと密接に関連してくるのであり、古代都城制度の展開過程を考察する上で重要なポイントとなろう。また、従來說かれている「飛鳥地域における7世紀代の方格地割」は実在せず、都城制施行の前提とはみなしがたいこと、わが国における条坊制を伴う最初の都城は、壬甲の乱終息後、数年のうちに、天武政権により建設が企図されたと考えられることも論じた。

（井上和人）